

「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵の機能

—「プリミティブな言葉の表現」の分析として—

西 田 直 樹*

1 はじめに

一般に「言葉」は、その順番を含めて「音声言語」と「文字言語」に大別されることが多い。この分類観念の背景には、人間が（あるいは人類として）、まず「音声言語」を獲得して、次いで「文字言語」を獲得するという「言葉」の獲得プロセスが影響していると考えられる。また「音声言語」と「文字言語」という用語は、メッセージの発信者からの視点に立った表現であるように思える。

それでは、メッセージの受信者の視点から見た時、「言葉」はどのように分類されるのであろうか。1つの例として「視覚言語」と「聴覚言語」という分類がある。「視覚言語」という表現は文字通り「視覚から入る言葉の情報」であり、「文字」よりも範囲が広く、記号やシンボル、絵画等も含む分類であるが、一方で発信者の「意志」（あるいは「発信意図」）と直結することを是とする傾向が強いようである。

本稿で取り上げる「仮名書き絵入り往生要集」（江戸時代成立）は、もともとは仏教の「論書」に属する『往生要集』（平安時代）を源流とするが、民衆布教を目的として感動を与える性質から、「文学作品」と位置付けられている。一方で、この「仮名書き絵入り往生要集」の作者は源信（942～1017）ともされている。江戸時代に成立した「仮名書き絵入り往生要集」の作者（つまりメッセージの発信者）が平安時代の僧侶の源信であるというのは、通常のコミュニケーションの構造の中では考えにくいものであろう。要するに「仮名書き絵入り往生要集」の制作者は、あくまでも源信のメッセージの仲介者という位置づけになるのである。このような成立の背景を持つ「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵を研究する概念として、私は、「文字言語」という概念はもとより、「視覚言語」という概念も適当とは言えないと考えている。そこで便宜的に「非文字言語」という言葉を用いて研究を行って来た。「非文字言語」は、ある意味で「プリミティブ（原初的）な言葉の表現」と言える。子どもを含めた「文字を能く読めない者」にも『往生要集』に説かれた思想（教義）を広く伝える役割を果たしたと言える。

以上のような概念に基づき、本稿では「挿絵」という「プリミティブな言葉の表現」の

*作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科 教授

歴史的研究という立場から、江戸時代に刊行された「仮名書き絵入り往生要集」(寛文11年本〈1834年刊〉・第1図)の分析し、その解説を行った。

2 「仮名書き絵入り往生要集」について

(1) 「仮名書き絵入り往生要集」の書誌

「仮名書き絵入り往生要集」は、源信が漢文で書いた『往生要集』(985年成立)の内容を多くの人に伝え、正しい信仰に導きたいという熱意によって江戸時代のほぼ全期間にわたって刊行された。寛文11年本の巻の一冒頭に、『此集はかたじけなくも恵心の僧都のえらび給／ひしをおろかなる筆をそめて大和がなにやはら／ぐる事罪に似たりといへども一文ふ通のしづの身／あま入道までもあまねく読やすくし／て一入後生菩提の道に入なるとより共成侍らんにや』(寛文11年本 三丁オモテ)という源信の『往生要集』には無い一文が加えられているのも、そのためである。結果として、「仮名書き絵入り往生要集」は、現代に至るまで日本人の阿弥陀信仰とそれと背反する地獄観(むしろ、こちらの方が思想的影響が強い。)を形成しているのである。同時に日本人の道德観の基盤を成す役割も果たしていると言えよう。「仮名書き絵入り往生要集」の中で強くかつ繰り返し説かれる『五悪』(①人を殺す罪、②盗みをはたらく罪、③邪な性欲にふける罪、④嘘をつく罪、⑤酒を飲み精神を墮落させる罪)は、現代においても悪行として受け止められているものである。

この「仮名書き絵入り往生要集」には祖本が存在する。それは『往生要集絵巻』と呼ばれる六巻の絵巻である。ただしこの『往生要集絵巻』の詞章は、漢字片仮名交じり文で書かれたものであり、詞章に読み仮名は降られていない。つまり「仮名書き絵入り往生要集」の詞章の成立までには、『往生要集絵巻』から、少なくとももう一段階の課程を経ていることになる。そのため「仮名書き絵入り往生要集」の研究において『往生要集』絵巻は「原本」では無く「祖本」という呼称を用いるのが適当なのである。

なおこの『往生要集絵巻』の詞章は、寛永8年(1631)本に刊行された『往生要集』の系統の読み下し文に基づいて書かれている。寛永8年本は、初めて返り点や送り仮名といった「訓点」(漢文を和訳するための目安となる記号類)を漢文の本文と一緒に印刷した本である。つまり、漢文で書かれた『往生要集』を、少しでも読みやすくしてその教えを広めたいという意図を持って編纂されたものなのである。もっとも、漢文に訓点を印刷して読みやすいと感じる日本人は、当時でも僧侶や貴族、武士などの高い教養を身につけた人々に限られていた。『往生要集』の思想を更に広めるためには、訓点を付した漢文の文章を、もっと平易な漢字片仮名交じり文に改め、すでに寺院などで布教に用いられていた「地獄絵」や「六道絵」、「地獄極楽図」、「観経曼荼羅」等に基づく挿絵を加えて絵巻に仕上げた。これが『往生要集絵巻』である。『往生要集絵巻』巻末には、源信自筆を装った文章で、『往

『往生要集』の普及を願う漢文の「跋文」が添えられている。『往生要集絵巻』の制作者の絵巻制作の意図を取ることができる部分である。

『往生要集絵巻』は、民衆布教の場で使われ、好評であった。この『往生要集絵巻』を版本として売り出して『往生要集』の思想をもっと広めようという動きが生まれている。寛文3年〈1663〉には、「仮名書き絵入り往生要集」の最初の版本が刊行された。以後、嘉永年間〈1848～1853〉に至るまで、10種類を超える版が刊行され日本人の地獄観、他界観、道德観に大きな影響を与えたのである。

17世紀後半から19世紀半ばと、約300年間に渡って版を変えながら刊行された「仮名書き絵入り往生要集」の歴史は、初期（17世紀）、中期（18世紀）、後期（19世紀）と3期に分けて考えることができる。それぞれの時期の挿絵には同じ内容の挿絵であっても、時代ごとの変化が見られる。それは、「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵は浮世絵をはじめとする出版文化の発達と共に、判型や表現を進歩向上させたのだと言えるだろう。

我が国において商業出版が盛んになるのは寛永年間〈1623～1645〉からである。山桜などの板を掘って印刷する「木版印刷」が普及して、これが江戸時代の印刷の主流となって行った。印刷作業は分業で行われ、絵師、彫師、刷り師など専門的な技能を持った職人が一冊の本の出版に関わるようになった。それだけに、本が売れるか売れないかが、大きな問題となった。「仮名書き絵入り往生要集」諸本の変遷を考える場合には、思想史、美術史の視点だけではなく、「売れたか」「売れないか」という商業的な要素を含めて考えることが大切なのである。本稿で行う「プリミティブな言葉の表現分析」として行う「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵の分析研究においても、挿絵の場面の選択や内容、構図を含めてその作画意図を考える場合には、商業的要素を忘れてはならない。

「初期」「中期」「後期」の「仮名書き絵入り往生要集」の特色をまとめると次のようになる。

①初期（17世紀）「仮名書き絵入り往生要集」の特色

初期に属するのは、寛文、天和、元禄に刊行された諸本である。『往生要集絵巻』を元に寛文3年本が作られ、その寛文3年本を参考にした類版本が出版された時期である。「仮名書き絵入り往生要集」の黎明期と位置付けることができる。

初期の「仮名書き絵入り往生要集」が刊行されたのは、浮世絵版画の創始者の菱川師宣（1630～1694）が活躍した時代である。墨一色の線画で描かれている初期の「仮名書き絵入り往生要集」には、罪人を描く輪郭線が柔らかく、この時期の単色の浮世絵（墨摺絵）に通じるものがある。魅力的な挿絵と読みやすい漢字平仮名交じり文の「仮名書き絵入り往生要集」は、寺院における檀家の布教などに使われたと考えられる。

②中期（18世紀）「仮名書き絵入り往生要集」の特色

中期に属するのは、寛政2年（1790）に刊行された1本のみである。元禄2年（1689）に刊行された初期の「仮名書き絵入り往生要集」を元に新たに版木を起こして刊行した本である。挿絵は初期の「師宣風」を継承していて大きな変化はない。

③後期（19世紀）「仮名書き絵入り往生要集」の特色

後期に属するのは、天保14年（1843）や嘉永年間（1848～1853）刊行された2本である。後期「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵は、いずれも八田華堂金彦という近江出身の絵師が描いている。挿絵は単色の浮世絵に近いものであり、成熟した江戸時代版本制作技術を十分に生かしたものとなっている。

(2)「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵の機能

次に、この「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵が、書全体の中でどのような役割（機能）を担っているかについて考えてみたい。前節の書誌において述べた通り、この「仮名書き絵入り往生要集」は、漢文詞章の『往生要集』と「地獄絵」のそれぞれに源流を持つため、その役割も同時代の絵入版本（絵草子等）と比べ複雑である。

試みに「仮名書き絵入り往生要集」の「第一 等活地獄の事」の中の責め苦の一部を取り上げ、「漢文詞章」と「仮名書き詞章」、「挿絵」の比較対象を行うこととする。この場面は、生前に殺生の罪を犯した者が、死後等活地獄に墮ち、鉄棒や鉄杖を持った獄卒に身体を打ち碎かれる場面である。①漢文詞章→②仮名書き詞章→③挿絵の順で示せば、以下の通りである。

①（漢文詞章）

『或獄卒 手執鉄杖鉄棒 従頭至足 遍皆打築 身軀破碎 猶如沙揣』

※なお源信は、この記述を仏典の『智度論』『瑜伽論』『諸経要集』をもとに記述している。

②（仮名書き詞章）

『あるいひは獄卒どもくろがねの棒をもつてかしらより足まであまねくうちひしぎて
身体やぶれくたくる事いさこのごとし』

※「仮名書き絵入り往生要集」の詞章では、漢文詞章において「鉄杖鉄棒（てつじょう てつぼう）」と記しているところ「くろがねの棒」と書き改めていたり、「沙揣（しゃだん）」を「いさご」となど、読み手に理解しやすい内容となるよう工夫が凝

らされている。例えば「鉄杖」と「鉄棒」をまとめて「くろがねの棒」としたのは、江戸時代において「鉄杖」が身近なものでは無く、反対に「鉄棒」は町方の捕り物道具などとして身近な存在であったことが起因している。

③ (挿絵) (挿絵による非文字表現)

「第一 等活地獄の事 挿絵 (3丁ウラ 部分)」



※例示した「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵では、獄卒はかなり長い鉄棒を両手で振り下ろして罪人を叩いている。鉄棒で叩かれる罪人(亡者)は2人で、地面に腹ばいになっている。鉄棒で叩かれた箇所は肉が裂けて血がほとぼしっている。右側に描かれている罪人の身体には鉄棒が深く打ちこまれていて、身体を切断しそうなほどである。このような責苦の細かい内容は、挿絵でなければ読み手に伝えることが出来ない内容である。

このように「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵は、漢文や仮名書きの詞章に書かれている内容を的確に表現しながら、しかも両詞章よりも多くの情報を具体的に読み手へと伝える機能を持っている。『徳川時代に入つて、その普及版として作られた繪入和文往生要集が廣く民間に行き互るやうになつてからは、地獄極楽乃至六道の觀念は、遂に我が國民一般から抜き去ることの出來ぬ思想進行とさへなつた』(花山信勝 1937 『原本校註 漢和対照 往生要集』P.3)と言われるように、「仮名書き絵入り往生要集」が日本人の思想信仰に与えた影響は大きく、それは現代にまで脈々と受け継がれている点は注目に値する。

具象的な表現である絵(あるいは挿絵)は、抽象的な文字に比べてプリミティブ(原始的)な言葉の表現である。それは、文字の進化というものが絵から始まり、その絵が一般化する象形文字、表意文字、表音文字というように抽象性を高めて行く過程からも明らかである。しかし、この「プリミティブな言葉の表現」は、文字による言葉の表現が流布する中で「文字言語」とは異なる「非文字言語」の地位を確立していったのである。

3 寛文11年本『忍入 往生要集』第1図の分析

(1)詞章の内容と原漢文の表現範囲

次に、寛文11年本の第1図が表現する内容の範囲について規定して行く。具体的には、挿絵が表現する部分（等活地獄の部分）の仮名書き文の詞章を示し、参考として対応する原漢文を示す。最後に、第1図の挿絵の内容分析を行う。

なお、寛文11年本の詞章の翻刻及び原漢文との対照については、これまで行われておらず、本稿に於いて初めて行うものであり、また紙数の関係から影印を掲載することが叶わないため、仮名書き詞章については改丁改行等可能なかぎり原資料の形に忠実な形でその内容を示している。^(注1)

①本文（仮名書き詞章）

第一 等活地獄の事

(四丁 ウラ)

〇一つに等活地獄といふはこの閻浮提の下一千由
旬にありたてよこ一万由旬なり此中の罪人た
がひに常に害心をいだきて若たまへあひみれば
獵人の鹿にあへるがごとしをのくろがねの爪をと
ぎたてゝたがひにまなこをつかみしゝむらをひきさ^(注2)

血ながれしゝむら尽て骨ばかりのこるあるひは
獄卒どもくろがねの棒をもつてかしらより足ま
であまねくうちひしぎて身体やぶれくだくる事いさ
ごのごとしあるひは極めて利刀にて分ゝに肉をきり
さく事厨者の魚肉をきるがごとししかるに涼しき風
ふき来ればよみがへりて本のかたちとなり又たち
まちに前のごとく苦をうくる也あるひは虚空に聲有
てこのもろへの有情還て等活すべしといひあるひ
は獄卒くろがねのさすまたをもつて地を打て
活々と唱ゆるといふ人間の五十年を四天王の一
日一夜として其寿命五百歳なり又四天王の
寿命をこのぢごくの一日一夜として寿命五百歳也
殺生したるもの此ぢごくにをつるなり又このぢご

(五丁 オモテ)

くの四方の門のそとに眷属の別所とて十六

(五丁 ウラ)

の地獄あり一つには屎泥処という此ちごくには極
めて熱き糞と泥とありそのあぢはひははなはだ
にがくして金剛のくちばしある虫その中に充満
せり罪人ども中に居て此あつき糞を食とす
もろへゝの虫あつまりてこの罪人を一時にきほひく
らふて皮をやぶりし、むらをはみ骨をかふり髓を
すふむかししかをころし鳥をころしたるもの此ちごくに
おつる也二つにはちごく刀輪處といふちごくはくろがねの
壁めぐりかこみてその廣さ十由旬也猛火さかんにて
つねに其中にみちたり人間の火をこれにくらぶれば
雪のごとし此猛火はわづかに身にふるれば芥子のこ
とくにくだくる也又熱熱のまるかせをふらす事車

軸の雨のごとし又つるぎの林ありその刃の利ことは
髪すじ兎の毛をふきかけてもたまらずして微
塵となるいはんや罪人の身をや又つるぎをふらす
事虚空より大瀧のおつるに似たりかくのごとくも
ろへゝのくげんまじわりきたりてたへ忍ぶべからずむ
かし物をむさぼりて殺生したるもの此ちごくにおつる也
三つには梵熱處といふ此ちごくは罪人をとらへて
くろがねの瓮の中に入れてこれを煎じにる事ま
めのごとしむかし殺生して煮て食したるもの此ちご
くにおつる也四つには多苦處といふ此地獄には十千
億種の無量の楚毒ありつぶさに説べからずむかし
縄をもつて人を縛り杖をもつて人を打人をか
りてとをきみちに行しめ嶮しき処より人をおとし

(六丁 オモテ)

煙をふすべて人をなやまし小児を恐からしめ此ほかこ
れらにごとき種々に人をなやませたるもの皆此ちごく
におつる也五つには闇冥處と云此地ごくの罪人は黒闇
のところにて常に闇火にやきこがさる又大力のま
う風吹て金剛山の山と山を吹合へて身をす
りくだく事沙をちらすごとし又熱風にふかる事
利刀にて切割ごとしむかし大火炎にて羊の口鼻

(六丁 ウラ)

をふさぎ二つの博の中に亀ををきて殺した
るもの此ちごくにおつる也六つには不喜處と云此ち
ごくには大火炎有て昼夜身をやきもやす又熱炎の
くちばしある鳥いぬきつね其聲きはめて悪くして
身の毛よだちおそろし常にきたり食ふて骨肉
狼藉とみだりなり金剛のくちばしある虫骨の中

に往来して髓をくらへりむかし貝をふき鼓をうち (七丁 オモテ)
おそるべき聲をなして鳥けだものころしたるもの此
ちごくにおつる也七つには極苦處という嶮しき岸
のもとに有て常にくろがねの火にやきこがさるむかし
ほしるまゝにして殺生したるもの此ちごくにおつる也
已上正法念經にありのこりて九つは經の中に
とすこれになぞらへしるべし

②対応する原漢文（『往生要集』原文）^(注3)

初、等活地獄者、在於此閻浮提之下一千由旬、縱広一万由旬、此中罪人、互常懷害心、若適相見、如獶者逢鹿、各以鉄爪、而互齧裂、血肉既尽、唯有殘骨、或獄卒、手執鉄丈杖鉄棒、從頭至足、遍皆打築、身体破碎、猶如沙揣、或以極利刀、分分割肉、如厨者屠魚肉、涼風來吹、尋活如故、歎然復歸、如前受苦、或云、空中声云、此諸有情、可還等活、或云、獄卒以鉄叉打地、唱云活活、如是等苦、不可具述（已上、依智度論瑜伽論諸經要集撰之）以人間五十念、為四天王天一日一夜、其寿五百歳、以四天王天寿、為此地獄一日一夜、其寿五百歳、煞生之者、墮此中（已上寿量依俱舍、依正法念經、下六尚同之）優婆塞戒經、以初天一年、為初地獄日夜、下去准之

此地獄四門之外、復有十六眷屬別、処一屎泥処、謂有極熱屎泥、其味最苦、金剛嘴虫、充滿其中、罪人在中、食此熱屎、諸虫聚集、一時競食、破皮瞰穴、折骨啞髓、昔煞鹿煞鳥之者、墮此中、二刀輪処、謂鉄壁周匝、高十由旬、猛火熾燃、常滿其中、人間之火、比此如雪、纔触其身、碎如芥子、又雨熱鉄、猶如盛雨、復有刀林、其刃如雨而下、衆苦交至、不可堪忍、昔食物煞生之者、墮此中、三瓮熱処、謂執罪人入鉄瓮中、煎熱如豆、昔煞生煮食之者、墮此中、四多苦処、謂此地獄、有十千億種無料楚毒、不可具說、昔以繩縛人、以杖打人、駝人令行於遠路、從嶮処落人、薰煙惱人、令怖小兒、如是等、種種惱人之者、昔墮此中、五闇冥処、謂在黑闇処、常為闇火所燒、大力猛風、吹金剛山、合摩合碎、猶如散沙、熱風所吹、如利刀割、昔唵羊口鼻、二博之中置龜押煞者、墮此中、

六不喜処、謂有大火炎、昼夜焚燃、熱炎嘴鳥、狗犬野干、其声極悪、甚可怖畏、常来食噉、骨肉狼藉、金剛嘴虫、骨中往来、而食其髓、昔吹貝打鼓、作可畏声、煞害鳥獸之者、墮此中、七極苦処、謂在嶮岸下、常為鉄火所焼、昔放逸煞生之者、墮此中（已上依正法念經、自余九処、經中不説）

(2)挿絵の内容分析

①挿絵全体の場面構成について

第1図の挿絵は四つの場面と16の要素から成る。それぞれの場면을A~D、それぞれの要素を①~⑯に分類し、その内容を示せば以下の通りである。

(第1図 等活地獄部分の挿絵)



A：棒を持った獄卒が二人の罪人を追いかけて叩いている場面。

- ①獄卒1：両手で長い金棒を持ち、罪人を追いかけて叩き斬っている。
- ②罪人1：獄卒に背中から叩き斬られ、地面に腹ばいに倒れて大量の血を流して苦しんでいる。
- ③罪人2：獄卒に背中と首の後ろの部分叩き斬られ、地面に腹ばいに倒れて血を流している。

B：刀を持った獄卒が、三人の罪人を追いかけて、そのうちの一人を切り倒した場面。

- ④獄卒2：右手に刀を持って振りかざし、罪人を追いかけている。すでに一人を切り倒して残った二人を追っている。

- ⑤罪人3：獄卒の刀で頭、背中、足の付け根を斬られ、地面に腹ばいに倒れている。
それぞれの傷は深く、頭は大きく割れ、背中や足もほぼ切断された状態で、
かろうじて繋がっている。顔に苦痛の表情は無く、すでに事切れている状態。
- ⑥罪人4：獄卒に追われながらも両手を合わせて助けを願っている。
- ⑦罪人5：獄卒に追われている。

C：刺又を持った獄卒が、ばらばらになった罪人に「活活」と唱える場面。

- ⑧獄卒3：右手に刺又を持ち、左手の小手をかざして「活活」と唱えている。三体描
かれている獄卒の中で、この獄卒だけが革鎧を身に着けている。このこと
から三体の獄卒の中で最上位の者であることが判る。
- ⑨罪人6：地面に座り込み、悲しみの表情を浮かべている。
- ⑩罪人7：地面に仰向けに倒れた状態で、身体を振って悲しんでいる。

D：四匹の羽虫が三人の罪人を襲う場面。

- ⑪罪人8：尿泥の中で仰向けになり、頭と左太腿の二か所から羽虫に食われて苦しん
でいる。
- ⑫罪人9：尿泥の中で頭から羽虫に食われて苦しんでいる。
- ⑬罪人10：尿泥の中を這い回り、背中から羽虫に食われて苦しんでいる。
- ⑭羽虫1：罪人の頭に噛みつき食らっている。
- ⑮羽虫2：罪人の太腿に噛みつき食らっている。
- ⑯羽虫3：罪人の背中に噛みつき食らっている。

補足：色紙形の詞章について

第1図の中には2カ所色紙形が置かれている。「地獄絵」や「六道絵」には、この
ような色紙形が描かれる（あるいは実際に短冊状の色紙を貼る）ことがある。描かれ
ている内容は、地獄の名称や解説文が書き込まれることが多い。挿絵の解釈を補助す
る役割を担っている。

色紙形の位置とそれぞれの内容は以下の通りである。

- ・色紙形1：三丁ウラの右上に置かれており、内容は「第一とうくはつちごくの処也」。
- ・色紙形2：四丁オモテの中央上部に置かれており、内容は「ごくそつかつへと、
なへよみかへる」。

(3)場面及び主要な要素と詞章との対照

次に、(A)～(D)の各場面の挿絵が、詞章のどの部分を描いているのかを明らかにする。

なお、挿絵の成立については、仮名書きの詞章以外に『往生要集』（漢文）に基づいて描かれた「地獄絵」や「六道絵」の影響も考えられる。そこで参考として、仮名書き詞章に対応する原漢文も併せて表示した。

(A) 鉄棒を持った獄卒が二人の罪人を追いかけて叩いている場面。

【対応する仮名書き詞章】

『獄卒どもくろがねの棒をもつてかしらより足まであまねくうちひしぎて身体やぶれく
くだくる事いさごのごとし』

(参考:原漢文)『或獄卒、手執鉄杖杖鉄棒、従頭至足、遍皆打築、身体破碎、猶如沙揣、』

(B) 刀を持った獄卒が、三人の罪人を追いかけて、そのうちの一人を切り倒した場面。

【対応する仮名書き詞章】

『あるひは極めて利刀にて分、に肉をきりさく事厨者の魚肉をきるがごとし』

(参考:原漢文)『或以極利刀、分分割肉、如厨者屠魚肉、』

(C) 刺叉を持った獄卒が、ばらばらになった罪人に「活活」と唱える場面。

【対応する仮名書き詞章】

『あるひは獄卒くろがねのさすまたをもつて地を打て活々と唱ゆるといふ』

(参考:原漢文)『或云、獄卒以鉄叉打地、唱云活活、』

(D) 別所の小地獄である「屎泥処」で四匹の虫が三人の罪人を襲う場面。

【対応する仮名書き詞章】

『もろへの虫あつまりてこの罪人を一時にきほひくらふて皮をやぶりし、むらをは
み骨をかふり髓をすふ』

(参考:原漢文)『諸虫聚集、一時競食、破皮瞰穴、折骨啖髓』

(4)寛文11年本『悉入 往生要集』第1図が表現する言葉（非文字言語）の分析

最後に、この寛文11年本『悉入 往生要集』の第1図の挿絵が、どのような内容を表現するのか、その分析を行う。

(挿絵全体が表現するもの)

「第一 等活地獄」挿絵は、上巻の三丁ウラから四丁オモテにかけて見開きの形で描かれている。等活地獄の詞章自体は四丁ウラ8行目から八丁オモテ7行目までであるから、読み手は、この挿絵を見て次に語られる等活地獄全体をイメージしつつ詞章に語られる大

地獄や別所の小地獄を読み進めて行く（あるいは音読を聞く）ことになる。絵巻でいう「前図後文形式」と同様の効果をもたらすことになる。寛文11年本の最初の挿絵でもあり、これから語られる様々な地獄の様相を象徴する一枚でもある。

次に、(A)～(D)の書く場面の内容について読み解けば次に示す通りである。

(A) 鉄棒を持った獄卒が二人の罪人を追いかけ叩いている場面。

この場面では、鉄棒を持った獄卒が罪人を二人まとめて叩き斬っている。獄卒は、鉄棒を両手で持って力まかせに振り下ろしている。鉄棒であるから刃がついている訳ではない。しかし鉄棒は罪人の身体に深く食い込んでいる。獄卒の力の強さを読み取ることができる。地獄で罪人に責苦を与える獄卒が、人間には抗えないほどの力を持っていることを読み手は感じ、殺生の罪を犯す恐ろしさを感じるのである。

(B) 刀を持った獄卒が、三人の罪人を追いかけ、そのうちの一人を切り倒した場面。

この場面では、獄卒が刀を振り上げて罪人を追いかけている。豪力の獄卒であるから、走る速さもすさまじく、一度獄卒に目を付けられて追われたら、とても逃げ切れるものではない。すでに一人の罪人が散々に斬られて地面の上で事切れている。その身体には何か所もの深い傷があり大量の血が流れ出ている。獄卒に追われている罪人の一人は、獄卒に向かって手を合わせて救いを請うが、すでに生前犯した殺生の罪が許されるものではない。獄卒は刀を振り上げ罪人に斬りかかっている。もう一人の罪人も獄卒の姿に恐れ慄きながら必死に逃げるが、これも逃れられるものではない。

(C) 刺又を持った獄卒が、ばらばらになった罪人に「活活」と唱える場面。

この場面では右手に刺又を持った獄卒が小手をかざして地獄の様子を見ている。ここに描かれる獄卒は中国風の革鎧を身に着けており、これまで罪人を打ち砕き切り刻んでいた腰巻と脚絆だけの獄卒よりも上位者であることが判る。罪人たちが一様に責め苦を受けて微塵に砕かれた頃合いを見計らい、「活活（生き返れ、生き返れ）」と唱えている。すると一度は微塵に砕けた罪人は地獄に置いて生まれ変わり元の姿になる。しかし生まれ変わった場所が地獄であるから、人間世界において生前に犯した殺生の罪は消えない。再び獄卒に追われ叩き斬られたり、切り刻まれたりして苦しむのである。それを悟って悲しむ罪人の中には、地面に仰向けになり、身を振って泣き叫ぶ者もいる。

(D) 別所の小地獄である「屎泥処」で四匹の虫が三人の罪人を襲う場面。

この場面では、「屎泥処」という題地獄の周囲にある小地獄の様子が描かれている。

画面右下の部分に石（白い塊）や糞尿（黒い塊）が罪人たちを囲むようにえがかれ、この部分が別所の小地獄を描いていることを示している。ここに墮ちた罪人は、臭く熱い屎泥の中で苦しんでいる。羽の生えた虫が罪人たちにたかり、頭や背中、ところ構わず食いついて来る。罪人たちは羽虫に骨肉、髓に至るまで食われて苦しむ。

(5)挿絵の表現するもの

以上のように、初期「仮名書き絵入り往生要集」の一本である寛文11年本（第1図）を例に、「仮名書き絵入り往生要集」における詞章と挿絵について、対照作業と分析・読解を行った。「仮名書き絵入り往生要集」は、その呼称が示す通り「仮名書きの詞章」と「挿絵」という二つの要素から成り立っている。「挿絵」というと、とかく文章（詞章）に付随する補助的なものと位置付けられがちである。しかし今回の対照作業の中でもあきらかとなったように、「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵は、原漢文（つまり源信が書いた『往生要集』の原文）を仮名書き文に和らげただけでは表現しきれない地獄の様相を具体的に読み手に伝える役割を果たしていたのである。

その意味で、「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵は、詞章と並行して存在する非文字言語としての性格を強く持っている。それは言い方を変えれば「絵往生要集」と呼べるものかも知れない。

4 おわりに

本稿では、「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵を「非文字言語」と位置付ける新たな視点から研究した。周知のように、江戸時代の識字率が決して低いものでは無い。また音読の習慣から文字の書かれた情報の伝播もかなり広範囲に及んでいる。そういった環境を踏まえた上での仮定であるが、「仮名書き絵入り往生要集」の読み手の中には、それほど文字を読むことに堪能ではなく、見出しと挿絵（色紙形を含む）をパラパラとめくりながら、『往生要集』の思想を理解した者もいたのではないだろうか。そのような読み手にとって「仮名書き絵入り往生要集」の挿絵は、「プリミティブな言葉の表現」と呼べるものであったろう。

さて、このような江戸時代の文字を読むことが堪能でない読み手の読み方は、現代の幼児が絵本等を読む方法と類似している。本稿において新たな視点から行った「仮名書き絵入り往生要集」の研究方法は、児童文学作品の挿絵や絵本の絵の研究方法としても有効なものではないだろうか。

【注】

（注1）翻刻にあたっては重字（約物）の中でワープロソフトで表記できないものについては〈 〉の中に「よみ」を入れて表した。

(注2) この部分は、「く」の一字が脱落している。寛文11年本の詞章の祖本があったことを伺わせる事象でもある。

(注3) 原漢文は、岩波書店刊『日本思想体系 源信』(石田瑞麿編)のp. 324～p. 325の翻刻を用いた。

【参考文献】

- ・『日本の地獄絵』 宮 次男 編 芳賀書店(昭和48年)
- ・『六道絵』 宮 次男 著 至文堂(昭和63年)
- ・『六道絵の研究』 中野玄三 著 淡交社(平成元年)
- ・『日本人の地獄と極楽』 五来 重 著 人文書院(平成3年)
- ・『地獄ものがたり』 竹本朝之 編 徳間書店(平成24年)